



五風十雨の願い



高松市長

大西 秀人

平成23年3月11日午後2時46分。東日本の広範な地域を観測史上最大のマグニチュード9.0という巨大地震が襲いました。同時に引き起こされた1000年に一度とも言われる巨大津波により、東北地方の太平洋沿岸地域を中心に、津々浦々のまちが根こそぎかさられました。しばらくして「東日本大震災」と名付けられたこの災害は、我が国に未曾有の甚大な被害をもたらしています。

3月11日を境にして、我が国の「戦後」が終わり「災後」が始まると記した識者がいました。原子力発電所の事故の深刻な影響で先が見通せず、予断を許さない状況が続いていることを考えると、全く災害は終息しておらず、「災中」にあると書いた新聞もありました。この大震災が我が国の歴史において一つの時代を画する大きな悲劇であることは間違いのないでしょう。

「五風十雨」という言葉があります。5日に一度風が吹き、10日に一度雨が降る、農作にとって都合のよい気候を言い、転じて天下泰平であることの例えとされます。地球温暖化による異常気象や今回の地震のような天変地異の頻発化が懸念される昨今、「五風十雨」の日々は、我々の祈りの中だけにしか存在しなくなるのでしょうか。

いや、そのことは何も今に始まったものではないのかも知れません。もともと「五風十雨」という言葉とそれを願う心には、人間に都合が良いようにばかりはいかず喜怒哀楽に似た様々な顔を見せる自然に対しての大きな畏怖の念が含まれているように思います。太古の昔から、日本の自然は天変地異などにより、時に厳しく我々に試練を与えつつも、やがて収まれば、必ず四季折々の美しい日常の表情に戻って、傷ついた我々を温かく包み、癒してくれていたのです。そんな自然とのふさわしい付き合い方を日本人自身が熟知し、それぞれの地域において共同体の生活の中にもうまく溶け込ませ、実践してきたのです。

大震災と大津波による酷い爪痕が濃く残る被災地においても今年も桜の花が咲いて散り、「空青し山青し海青し」^(注)の5月が過ぎ、梅雨の湿った夏が巡ってきています。自然も人も美しい日本を再興するためにも、今一度自然との共生による持続可能な地域づくりとはどういうものかを皆で考えていく必要があります。「五風十雨」を願う心を持ちつつ、自然とともに豊かに暮らしていく「災後」における新たな知恵が求められているように思います。

被災地の一日も早い復興をお祈りしています。

(注) 「望郷五月歌」(佐藤春夫)の一節